

生活問題についての考察

An Essay on 'Social Case in Living'

吉村 公夫

Kimio YOSHIMURA

はじめに

社会福祉を社会的制度、社会的施策、社会的活動と考えた場合、その社会福祉が対象とするものは何かと問うと、「社会的問題」(孝橋正一)、「社会問題」(真田是)、「生活問題」(一番ヶ瀬康子)という対象規定が存在する。孝橋正一の社会的問題と一番ヶ瀬康子の生活問題のつながりについては、以前簡単ではあるが論究したので、¹⁾ここでは、社会福祉の対象規定としての生活問題を提起している論者の系譜を明らかにするのが企図である。

1 岡村重夫

ここでは、生活問題規定の論者を取り上げる前に、のちに関係する論者の見解を見てみる。まず、岡村重夫である。岡村は、社会福祉を社会制度とは考えず、個人と社会制度が結ぶ社会関係に不調和が生ずる場合に、その社会関係の不調和を調整するのが、社会福祉と規定する。²⁾岡村は、「社会問題」、「生活問題」という言葉も使っている。生活問題を「生活困難」と同義に使っている。生活問題ないし生活困難と。社会関係の不調和は生活困難とされ、社会制度は、専門分業制度や生活関連施策と拮げられ、この専門分業制度や生活関連施策が、社会成員の基本的な生活上の要求を充足すると。³⁾社会福祉は「全国民が…生活上の要求を充足するために、生活関連施策を利用、改善するように援助する…」⁴⁾と述べている。従来の自身の社会福祉の定義を、生活という言葉を持ち込むことでリニューアルしたと言える。

2 木田徹郎の規定

木田徹郎は、「社会福祉の対象はもちろん『現実の人の社会生活上の問題』ではあるが、決して個人だけが対象ではない。それで個人・家庭その他小集団・施設や企業体・学校・病院などの組織集団、地域社会および全体社会という分類方法によってもまた問題が分け得られる」と述べている。⁵⁾また、「人間の社会生活上の問題」⁶⁾や「社会生活問題」⁷⁾という言い方をしている。

「…対象たる諸問題を、収入不足という貧乏の問題、社会的に認められている適当な職業がないという問題、親子関係や夫婦関係の不和という家族問題、心身の病気や障害の問題、非行問題、

教育問題、住宅問題などのように分けてみると、これはどうてい1つにまとめることなどできないものだといえよう。「…ひとつの側面における問題は他のすべての側面にも強い影響が及ぶことは、人間の精神や身体のだこかにひとつの故障がおこった場合でも、生活の全体に影響するのと同じで、社会福祉事業の対象は、すべて『生活全体』における問題だと考えるほかないであろう」。⁸⁾

そして、こうした複雑な「問題の具体的な解決を、その第一歩から計画的に実践しようとするならば、その問題分析の枠組を、部分的、具体的な社会体系や生活構造の方向に求めて、諸問題を、本人自身における問題の視点、家族、友人、その他身近な集団における問題視点、地域社会、職業・産業等よりひろい視点という枠組で分析をすすめてゆくのが、少なくとも、より専門的な方法だといってよからう」と。⁹⁾「…ある一つの社会問題についても、(一)階級、階層などの全体的社会関係、(二)都市・農村・スラムなどの地域社会関係、(三)職業集団などの組織集団関係、(四)友人・近隣その他余暇集団関係、(五)学校集団関係、(六)家族関係、(七)パーソナリティ関係のような枠組で、その複雑ないろいろな側面から分析をすすめていくことが必要となる」と述べている。¹⁰⁾

こうした木田の見解には、実践志向というか、問題解決志向が顕著に現れている。また、社会福祉が対象とする社会生活上の問題は、複雑であるため、諸科学の知識を用いて、分析して理解し、計画的対策、処置が取られなければならないと。

社会生活上の問題が複雑なのは、現象的にか本質的にかという疑問が提出されるが、今日、社会福祉は問題解決の学問であり、学際科学であるという主張に合致する。

3 小松源助の規定

この木田の対象規定を継承していると思われるのが、小松源助である。小松は、「社会福祉は、現代社会において国民がもっている社会生活上の諸問題に対して、国民の生存を保障していくための一施策」と述べ、そうした「生活上の諸問題が資本主義社会における貧困を基因とする社会的原因から生み出されてきている」という。これが、貧困を基因とする生活問題で、さらに、今日では、その生活問題が資本主義社会の発展にともなって、量・質ともに拡大・深化をみせてきていると、さらに、そうした生活問題が、具体的には、「それぞれの状況における複雑な諸要因のからみあいによって多様性と個別性をもってあらわれてくる」と。¹¹⁾

その後の版で、小松は、脳卒中後遺症患者のかかえている生活問題として、経済問題、住宅問題、家族問題（家庭内不和、離婚問題）、職業問題、施設入所（単身者の問題）があると述べている。¹²⁾ また、ある離婚事例を取り上げて、生活問題の出現過程を説明している。その事例での生活問題には、①サラ金問題、②家事問題、③医療（精神障害）問題、④親族（老親）問題、⑤離婚問題、⑥児童問題、⑦就労問題があると述べている。¹³⁾

この脳卒中後遺症患者の生活問題として、説明されている、5つの問題は、脳卒中後遺症患者

が一般に抱えている問題である。一般的に、普遍的に。5つの問題の間の関係については、言及されていない。次の離婚事例のかかえる生活問題のうち7つ問題に関しては、時系列に出現してきた問題である。

この7つの問題について、時系列による列記以外に、構造化や相互関係の構図が示されるべきではないかとの批判が出されると思われる。しかし、小松は、この構造化や相互関係の構図を示すというところまで、踏み込まない。生活問題の中の、「下位生活問題」とでも名付けられる問題を確認するところでとどまる。そして、生活問題の解決に向かって、「下位生活問題」の直接的、具体的な解決のために、必要なサービスを活用させるように、援助活動を展開していくとする。各関係者が提携して。

小松はまた、「…生活問題は、具体的にはそれぞれの状況において多様な要因が連鎖的に交互作用し合う関係のなかで個別性をもって出現してくる」と述べている。¹⁴⁾つまり、生活問題にこれ以上の抽象化は必要ないということではないか。個々のケースの生活問題に関して、どのような「下位生活問題」があり、それらがどのように、交互作用しているかについては、ソーシャルワーカー（援助者）が確認すればいいと考えていると理解される。

小松の「連鎖的に交互作用し合う関係」というのは、木田の「…もしわれわれの家庭にその中のただひとつの問題、例えば職業がないとか、あつてもうまく行かないという問題がおこると、実はともすれば家庭不和、教育、非行、貧困というように、つぎつぎと関連して他の諸問題がおこる可能性がきわめて多い」¹⁵⁾という指摘と合い通じる。

木田徹郎の「社会生活問題」や小松源助の「生活問題」についての考え方は、以下の「このような事例を見ると、生活困窮という生活問題に陥り、生活保護を受けるに至る経過と背景には、複雑な問題と経過のあること、またそれがしばしば、長期化・深刻化するということを知るのである。したがって生活保護は生活保護法に基づく最低生活保障のための経済給付のみでなく、経済給付をとおして、生活困窮にかかわるいろいろな生活問題についての相談援助が必要となる。ここに社会福祉実践の課題があるといえよう」¹⁶⁾という指摘に通じる。

また、高田真治が「生活問題と社会福祉の機能」というテーマで述べている、「…社会福祉は社会科学的な認識だけではなく、その認識に基づいて生活問題を明らかにし、その問題解決・軽減を図るという実践科学なのである。すなわち社会福祉の原理は、生活問題を明らかにする側面と、その問題を解決・軽減する側面の二つの側面が一体となっていなければならないのである」という指摘は、木田徹郎の社会生活問題に対する社会福祉の考え方に通じる。

木田の社会問題が現象観察の次元に止まってしまっていて、本質的認識に達していないとの批判が孝橋正一によってなされているが¹⁷⁾、木田の社会福祉理論はもっと顧みられてもいいのではないかと思う。現象や機能に注目するという意味で。

また、小松源助の「生活問題と援助活動」をめぐる考察ももっと検討されてしかるべきである。

註

- 1) 拙稿「社会福祉理論の性格についての考察」、『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第12号所収、2002年3月発行。
- 2) 拙稿「岡村理論についての一考察」、『同朋福祉』（社会福祉編）通巻26号所収、1998年3月発行、参照。
- 3) 岡村重夫著『社会福祉原論』、全国社会福祉協議会、1983年pp. 106～113。
- 4) 岡村重夫稿、「社会福祉の概念」、『現代社会福祉事典』改訂新版、全国社会福祉協議会、1988年、p. 3。
- 5) 木田徹郎編著『改訂社会福祉概論』、新日本法規出版、1971年、pp. 255～6。
- 6) 同書、p. 6。
- 7) 同書、p. 19。
- 8) 木田徹郎著『社会福祉事業』、川島書店、1967年、p. 73。
- 9) 木田編著、前掲書、p. 9。
- 10) 同書、pp. 9～10。
- 11) 小松源助、高沢武司、三友雅夫著『社会福祉-系統看護学講座-』、医学書院、1978年、第2版、pp. 21～31。
- 12) 小松源助、高沢武司、大島実、上野博子、三上義秀著『系統看護学講座 社会福祉』、医学書院、1988年、第5版、pp. 34～5。
- 13) 同書、pp. 36～41。
- 14) 同書、p. 36。
- 15) 木田著、前掲書、p. 73。
- 16) 高田真治稿、「序章 社会福祉原論とソーシャルワーカー」、岡本民夫、小林良二、高田真治編著『社会福祉士養成テキストブック1 社会福祉原論』所収、ミネルヴァ書房、2002年、p. 6。
- 17) 孝橋正一著『続社会事業の基本問題』、ミネルヴァ書房、1973年、p. 95～113。

参考文献

- 1 孝橋正一著『続 社会事業の基本問題』、ミネルヴァ書房、1973年。
- 2 一番ヶ瀬康子著『一番ヶ瀬康子 社会福祉著作集 第1巻 社会福祉とはなにか』、労働旬報社、1994年
- 3 古川孝順著『社会福祉学序説』、有斐閣、1994年。
- 4 吉田久一著『日本社会福祉理論史』、勁草書房、1995年。

(未完)